

ルーン文字の起源をめぐって (その3)

河崎 靖

1. ルーン文字の配列をめぐって

„Die Reihenfolge der Runen im älteren Futhork gilt als eins der ungelösten Probleme, die sich mit diesem Schreibsystem verbinden.“ (Vennemann 2009:832)

ルーン文字による言語資料が断片的であれ残っているおかげで、ゲルマン語の古い姿から中世の北欧語までを、データの裏付けに基づいた実在性のあるものとして捉えることができる。古フサルクの銘文はスカンディナヴィアとりわけデンマーク周辺に集まっている。それにしても、この北ヨーロッパ圏で、他の地域と比べかなり早い時期にアルファベットによる文字表記が独自の文字体系の発展形として定着していることになる。ルーン文字が直接どの文字体系をモデルにしたのかを問う問題提起を行っている先行研究を類別化してまとめれば、前章で概観した通り、①ラテン文字説、②ギリシア文字説、③北イタリア文字説となる。従来、常にこれら3つの学説が取り沙汰されてきたが、いずれにしても、長い先行研究史の中でこれまで統一的で決定的な見解が打ち出されることがなかった。本章では、かつて部分的には提出されることのあった④フェニキア文字説を再度とりあげ、合計4つの学説の強み・弱みを総合的に

検討することを目指したい。

ドイツの印欧語学者 H. Eichner (2006:101) が「近年、ルーン文字の起源を巡る議論が再び活気付いてきている」(In letzter Zeit hat sich die Diskussion über den Ursprung der germanischen Runenschrift wieder deutlich belebt.) と述べているように、ルーン文字の由来に関する話し合いの場が学会・シンポで盛んにもたれている。その中でも、2003 年 Eichstatt (ドイツ) で行われた専門者会議で提唱された次の 10 項目はルーン学研究の現状を示すものとして意義深いと言えよう¹。

1. ルーン銘文は発達の諸段階で当該の言語の特性を投影しているのか。

Hat die Runenschrift in ihren verschiedenen Entwicklungen Abbildfunktion auf die ihr zugrundeliegende Sprache? (*Does the runic script in its various stages of development mirror the language in question in a congruent manner?*)

2. 古フサルクは従来、言われているほど均質なものであるかどうか。

Ist das ältere Fupark so homogen wie behauptet wurde? (*The older fupark has been claimed to be homogeneous: is this statement correct?*)

3. フサルクの文字の配列順序（部分的なものも含めて）に何らかの意義を見出すことはできるであろうか。

Welchen Sinn hat es, ein Runenalphabet als Inschrift oder Teile daraus anzubringen? (*For which reasons would somebody inscribe a fupark row or parts of it on an object?*)

4. いろいろな地域でのフサルクのさまざまな発達はどのように説明できるか。

Wie sind die Entwicklungen in den einzelnen Regionen zu erklären? (*How can different developments in different areas be explained?*)

5. 個別言語間でのフサルクの発達に関連性はあるのか。

Gibt es Zusammenhänge zwischen den Entwicklungen in den Einzelsprachen?
(*Are there any connections between the developments of the individual languages?*)

6. 個々の言語の変化は文字表記の変化なのか書記機能の変化なのか。

Sind die Änderungen in den Einzelsprachen nur Veränderungen der Schrift oder auch des Schriftgebrauchs (Funktion)? (*Are the changes in the individual languages only changes in the script or do they also bring about changes in the functions of the script?*)

7. ラテン語のテキストがなぜルーン文字で記されたか。

Warum wurden lateinische Texte runisch aufgezeichnet? (*Why were Latin text written down in runes?*)

8. キリスト教はルーン文字の使用状況にどのような影響を及ぼしたか。

In welcher Weise verändert das Christentum die Gebrauchssituation der Runenschrift? (*In which way does christianity have an effect on the use and function of the runic script?*)

9. 文字の発達と言語の変化は並行的なものか。

Verlaufen Schrift- und Sprachentwicklung parallel? (*Are there any parallels*

between the development of the runic script and the language it reflects?)

10. フサルク銘文はいつの時代にとどの地域でどの程度アルファベットの特質を示しているのか。

Wann, wo und in welchem Umfang sind Fupark-Inschriften in alphabetischer Ordnung bezeugt? (*When, where and to what extent are there fupark inscriptions in alphabetical order?*)

実際のところ、ルーン文字は一体どこから来たのであろうか。ルーン文字はどの文字体系と類縁性をもつのであろうか。ルーン文字の由来に関するこの問題点は、実は今日でもはっきりわかっているわけではない。

Rune	ƿ	ᛚ	ᛒ	ᚠ	ᚱ	ᚿ, ʰ	ᚷ	ᚹ
Translit.	f	u	p	a	r	k	g	w
Phonem	/f/	/u(:)/	/p/	/a(:)/	/r/	/k/	/g/	/w/
Nummer	1	2	3	4	5	6	7	8

Rune	ᚱ, ᚲ	ᚢ	ᚦ	ᚷ, ᚸ	ᚩ	ᚱ	ᚷ	ᚹ, ᚺ, ᚻ
Translit.	h	n	i	j	ī	p	z	s
Phonem	/h/	/n/	/i(:)/	/j/	/i(:)/	/p/	(* /ř/)	/s/
Nummer	9	10	11	12	13	14	15	16

Rune	ᚦ	ᚷ, ᚸ	ᚱ	ᚲ	ᚩ	ᚰ	ᚷ	ᚹ
Translit.	t	b	e	m	l	ŋ	d	o
Phonem	/t/	/b/	/e(:)/	/m/	/l/	/ŋg/	/d/	/o(:)/
Nummer	17	18	19	20	21	22	23	24

従来の先行研究全体を捉えてみても、岡崎（1999:6）の言うように「ルーン文字創造の場所、母体、時代などを問うての、ルーン文字の起源の問題は、相

変わらず未解決と言わざるを得ない」というのが現状であり、特に文字の配列に関して「配列の順序がギリシア語やラテン語のそれと異なる説明を幾度か試みられたが、いずれも説得力に欠けるものばかりであった」（岡崎 1999:7）と見られている²。ルーン文字の配列はギリシア語やラテン語のアルファベットの文字配列（つまり ABC 順）とは合致しない³。

確かに、ギリシア語アルファベットやラテン語アルファベットから発達した書記体系はまずほとんど文字の配列を保持している。これに対し、ルーン文字は文字配列を示していず、ゆえに、この点をもって、ルーン文字が例えばラテン文字あるいはその文化に直接的には由来するものではないと論じる際の根拠として取り上げられる姿勢が少なからず見られる。こうした見解はごく近年でも見受けられる。

Für die Reihenfolge, die von allen anderen Alphabeten abweicht, gibt es keine Erklärung. (Seim 2007:158-159)

フェニキア文字までも考慮に入れながら、Krause（1970）は、

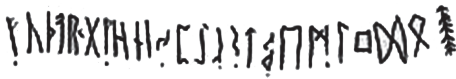
Die von den semitischen und den südeuropäischen Alphabeten völlig abweichende und bisher unerklärte Reihenfolge wird nach den ersten sechs Buchstaben „futhark“ genannt. (Krause 1970:14)

と述べている。あるいは、北イタリア文字説を採る Looijenga（1997）は、

The Futhark sequence has nothing to do with the ABC and will therefore have been developed separately, i.e. at a later stage than the adoption of the characters

(Looijenga1997:55)

いずれにしても、古フサルクは、民族大移動期からメロヴィング期にかけてゲルマン語圏全域で用いられているが、そのルーン文字が根本的に同じ順序で並んでいる⁴。具体的には



Kylverstein のルーン銘文

5 世紀初期：ゴットランド島の Kylverstein 銘文

6 世紀中頃：スウェーデン中部の Vadstena・Grumpan・Motala のブラクテアート（Brakteat: 片面に刻印された硬貨）

6 世紀後半：北ユトランド（デンマーク）の Lindkær・Over-Hornbæk のブラクテアート（不完全）

6 世紀前半：旧ユーゴスラビア Breza の石柱（やや不完全）

6 世紀後半：ブルゴーニュ（フランス）の Charnay の留め金

6 世紀前半：ブダペスト（ハンガリー）付近の Aquincum の留め金

などの銘文に、ルーン文字が同じ順序で記されている。



これは、単なる文字の練習のための手本などといったものとは考えにくい。上のいくつかの銘文が北はスウェーデン中部から西はフランス、南は旧ユーゴスラビアと広大な地域にわたり、同一の順序を示すこと⁵、また字形の一貫性からして、あるいは2世紀以前から順序も同一であったのではないかと推測することができる⁶。ゲルマン語圏がなお全体として、かなり一体化している状況を示している時代と言えよう⁷。確実なことは、『ゴート語訳聖書』（4世紀）が生まれた段階で、ルーン文字はアルファベットとして既に体系だっていたということである。先述の通り、27文字からなるゴート文字は、ギリシア語（20文字）・ラテン文字（5文字）・ルーン文字（2文字 **G**、**n**）を素材に生み出されたアルファベットであり、4世紀頃にはルーン文字が文字体系として機能していたと想定される。

さて、下に挙げる引用の原文は Wimmer（1887:142）のテキストである。

Welche gründe den alten runenmeister bewogen haben, die lateinische buchstabenfolge aufzugeben und gerade die zu wählen, welche wir in dem ältesten runenalphabet finden [...] können wir jetzt natürlich nicht bis ins einzelne entscheiden. (Morris 1988:20)

すなわち、Morris (1988) は先行研究の紹介の箇所での Wimmer (1887) を引いている。こうした見方が実に 100 年近くたっても変わっていないことを示していると言えよう。ルーン文字の独特な配列に関しては、これを説明せんと夥しい数の仮説が提示されてきた。かつて、かの Kluge (1919)⁸ が唱えた「主の祈り」説 (fader unser þu an radorum) は理由付けとして無理があるように感じられる⁹。あるいは、文字の名前から文字の順序を説明しようという試みがあった。すなわち、ルーン文字の名前は fehu「家畜」・ūr「野獣」または þuris「巨人」・ōs「神」といった対をなしている点に注目している。しかしながら、このやり方では一貫した説明はしばらく説得性に欠ける。さらに、他の文字体系からの影響を指摘する立場ももちろんあった (Arntz 1938 など)。Arntz (1938・1944) によると、北イタリアのヴェネト文字の順序をいくつか入れ替えるとルーン文字の配列に一致すると言うが、p・r・s・t 以外に本来、対応しているところはなく、その入れ替えは恣意的と言わざるを得ない。このように、ルーン文字の順序に関して、これまで何ら合理的で一貫性のある説明がないのである。

2. フェニキア文字説

前節で、ルーン文字の配列について概観した。この文字配列の問題に関しては、これまでの 3 学説 (ラテン文字説・ギリシア文字説・北イタリア文字説)

でもってしても解決の糸口が見えそうにない。従来の3学説と並んで、ルーン文字の誕生の背景に、フェニキア文字を想定する立場は、ラテン文字説・ギリシア文字説・北イタリア文字説とほぼ同時期に提唱され、今日まで断片的には継続されているが、あまり注目されてこなかった。例えば Jensen, Hans (1925) *Geschichte der Schrift* (Hannover : Orient-Buchhandlung Heinz Lafaire) で、フェニキア文字説が紹介されている (S.180-181)。次のようなものである。

Die Hypothese von einer direkten Herkunft aus dem durch phönikische Kaufleute übermittelten semitischen Alphabet, [...] ist seit den Untersuchungen von [...] Wimmer und nicht mehr diskutierbar.

ルーン学の研究動向により、ラテン文字説（Wimmer など）およびギリシア文字説（Bugge など）が優勢になり（後に北イタリア文字説も加わり）、ルーン文字が直接フェニキア文字に由来するという考え方は見向きもされなくなったという経緯である。しかしながら、ルーン文字の起源に焦点を当て、この問題が未解決であるとする時、ルーン文字が直接的にどの文字体系に由来しているのかという点ばかりでなく、文字の形状・文字の名前・文字の配列・書記ルールなど多角的な観点から総合的に捉えていく必要がある¹⁰。以下、かつての「主要3学説」では説明しきれない諸点を中心にルーン文字全般の特性を考察していく。フェニキア文字説だけでは十分に説得的な説明とはならないまでも、「第4の学説」として有効に機能することをここで示したい。

文字の形状については、4つの文字体系ともが元々、同じルーツでもあるので、程度の問題として扱うべきかもしれない。それでも相対的に見て、ルーン文字は特にギリシア文字・エトルリア文字と似ていると言えるであろう。先にこの章の第1節で見た文字配列に関する事柄は、ルーン学の当初から、その特

異性に関心が集まり、多くの研究者がさまざまな説明を試みてきた分野である。とりわけルーン文字の配列の出だしは「フサルク」の名の如く f-u-p-a-r-k と始まり（ABC 順でなく）、この場合には頭音法（acrophony）による説明が妥当であるように思われる。いずれにしても、フサルク全体での文字配列を考えるよりは、むしろ文字体系全体を部分に分けて考察する必要がある。また、書記法に関する傾向性として、ルーン文字には独自のルールがあり、この点、他の文字体系との対応関係を検討していかなければならない。こうしたいくつかの問題点を、これまでのようにラテン文字・ギリシア文字・北イタリア文字だけに依拠するのではなく、新たにフェニキア文字を加えて改めて問題のありかを捉え直すことによって、解明する方向にもっていきたい。

2-1. 頭音法に基づく文字配列

フサルクの並びは頭音法（acrophony）に基づいて配置されている。頭音法を具体例に即して示すと次のようである。

文字の種類 \ 文字の意味	牛の頭	家	掌	突き棒	水	目	人の頭	印
原シナイ文字 (前15世紀)								
ウガリト文字 (前14世紀)								
フェニキア文字 (前10世紀)								
フェニキア文字 (前6～前5世紀)								
古典ギリシア文字	A	B	K	Λ	M	O	P	T
ラテン文字	A	B	K	L	M	O	R	T

文字の変遷¹¹

こららの文字は、例えば「水」を表わす mēm は m、「人の頭」の表わす rēs は

r というように、各字母の最初の単音を音価としている（頭音法 acrophony の原則）。アルファベットという名称自体、文字列の最初の2文字、つまり āleph（アレフ「牛」）と bēth（ベート「家」）をつなぎあわせたものに他ならない。ラテン文字でも A「アー」、B「バー」は、ギリシア語のアルファ（ α ）・ベータ（ β ）を経由して、フェニキア文字の āleph「牛」、bēth「家」の語頭音にさかのぼる。

そもそも、ルーン文字が一つ一つ意味を有しているが、その意味というのが「馬」・「太陽」といった日常語的な名詞であるという特性については、既に K. Braunmüller (1998) が指摘している。決して、動詞的（食べる・歩くなど）あるいは形容詞的（美しい・明るい）な意味ではない点が注目に値する。この点を踏まえた上で、ルーン文字・フェニキア文字の配列順に意味の対応を見比べてみると、フサルクの出だしが fehu（「家畜」という意味）というルーン文字（音価は f）で始まるという事実と、フェニキア文字の最初の文字が āleph「牛」（音価は？〈声門閉鎖音〉）であることの間に関連性を見出すことは無理のない作業である¹²。しかも、紀元前2—1世紀のフェニキア文字の āleph は、当時のラテン語の F よりも、ルーン文字の f に形状が似ている。



フェニキア文字の a



ルーン文字の f

続いて、ルーン文字（2番目）の u とフェニキア文字（紀元前2—1世紀）の gīmel「ラクダ」の間にも形状の類似が見られる。ūruz が意味するのはオーロクス¹³（野生の牛）で「大きな動物」という共通点であるが、そもそもゲルマンの世界にラクダが知られていず、相当すると考えられた動物をあてがった可能性がある。さらに3番目のルーン文字 þur はフェニキア文字（紀元前2—1世紀）の dāleth「戸」に似ている。フェニキア文字側には [p] 音を表記する

記号はなかったため [d] 音で代用し（ヴェルナーの法則がはたらいていた、すなわち、[p] 音と [d] 音が異音の関係であった可能性もある）、意味の上ではゲルマン語の dur-i 「戸」、dur-a 「門」が対応している。この他の文字間に類似性が見られないのには、フェニキア文字の側の事情による。つまり、フェニキア文字の個々すべてにおいて、文字に付与された意味が認識できるわけではないのである。この点については Jensen（1969:272f.）が記している。

Sicher deutbar sind wohl nur die folgenden Namen: *āleph* = Rind, *bēth* = Haus, [...], *mēm* = Wasser, *nūn* = Fisch, [...].

文字体系同士の関連性を全面的に記述するには、ルーン文字とフェニキア文字が対応する実証例の数が十分ではない。しかしながら、これまでのように文字の形状を主な論点として、ラテン文字説・ギリシア文字説・北イタリア文字説に拠っている限り、なぜフサルクが頭音法（acrophony）をとっているのか説明できない。ギリシア文字のアルファ（ α ）・ベータ（ β ）には、確かにフェニキア文字の文字名の名残りが見てとれるが、音の上での対応関係を優先し、個々の文字のもつ意味を引き継いでいるわけではない。ラテン語はさらに進んで音価だけを採り入れているのである。



フェニキア文字の記号

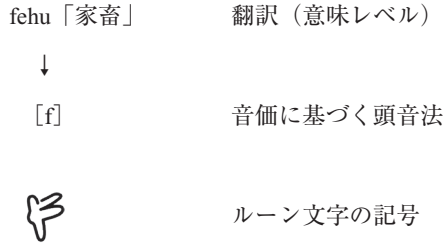
[?]

その音価



āleph 「牛」

頭音法



片や、アルファベットの後半部分（p・z・s・t）の文字の並びに注目してみると、ルーン文字の本来の文字列は、ラテン文字・ギリシア文字・北イタリア文字と同様、遡ればフェニキア文字の文字の配列と同じでないかと考えられる。

ラテン文字	p	q	r	s	t	
エトルリア文字	p	ś	q	r	s	t
ギリシア文字（西）	p			r	s	t
フェニキア文字	p	š	q	r	š	t
ルーン文字	p			z	s	t

この表のルーン文字の列の中に、ゲルマン祖語の有声摩擦音 z が西・北ゲルマン語で r になるプロセス（ロタシズム、紀元後 4 世紀）¹⁴ を組み込めば、全体の文字の並びが同じになっていることがわかる。

2－2．子音の表記法

ルーン文字には独特の書記ルールがある。一つは、CC → C：重子音は単一の子音字で表記されるというものである。ルーン文字では、同じ子音が2つ続く場合（しかも語の境界を越える場合も：C#C → C）1つの子音字で書かれる

傾向がある。例えば、Fino「フィノ（女性名）」は Finno という表記と並行して見出される（Berga の石）。また、同じ Atrå 銘文の中でも þessa : þesar「この」という両方の表記がある。もう一つ独自の書記法とは、NC → C : 調音位置が同じ子音の前で鼻音が消失するというものである（音変化が表記に反映されている）。鼻音が次に続く子音（同じ調音位置）に同化し（NC → CC）、その結果、生じる CC という重子音は1つの子音で表わされるため（CC → C）、鼻音が消失する（NC → C）。例えば、中世初期のデンマーク銘文で ubl（15回） : kumbl（3回）「墓石」という表記の揺れが見られたり、hadulaikaz（Kjølevig 銘文）で ha-n-dulaikaz という語形から n が落ちた現象が見出されたりしている。これらと同じ書記ルールがフェニキア文字にもある¹⁶。具体例として、milkittī「Kition の王」で、本来の語形 milk Kittī の k が 1 文字で表記されていたり、また、kaṭī ‘ich war’ や šat(u)「年」はそれぞれ kanti, šant(u) に由来し、t の前で鼻音 n が消失していたりする例が挙げられる。

これら二つの書記ルールは、ラテン語やギリシア語の書記慣習ではない、ルーン文字・フェニキア文字特有のものである。もっとも、後期のフェニキア文字ではラテン語の名前などを記す時に重子音が使われる¹⁷。ギリシア語はむしろ、フェニキア文字を導入した際、フェニキア文字の書記習慣に対し、重子音には2つの子音を用いるという書き方をするようになったのである。

2 - 3. 各語の区切り

ルーン銘文では、語と語の切れ目は明示されていない。ギリシア語・ラテン語は、ゲルマン人に、あるいは、ポエニ戦争後に征服されたカルタゴのフェニキア人に、むしろ語の区切りをもたらしした側であることを Friedrich & Röllig（1999:§ 3）が次のように述べている。

Erst in spätpunischen Inschriften findet sic hunter griechisch-römischem Einfluß gelegentlich wieder Worttrennung, teils durch Punkte ..., teils durch Spatien in unserer Art.

フェニキア銘文は、フェニキア本土やカルタゴを含む北アフリカだけでなく、メソポタミア・トルコ・ギリシア・エジプト・キプロス・シチリアなどからも出土しているが、初期のものでは、語と語の切れ目を示すために線を引いたり点を打ったりしているものの、後代のものは、語と語の間に全く区切りがおかれていない¹⁸。一般的には、語と語の間に線や点など区切りを特におかない書き方は、書記の形態としては原初的なものかもしれない。どの言語でも、語と語の切れ目がわかりにくければ、読みが困難になるであろうからである。

2 - 4. 半母音 w, j

ルーン文字体系の中には、半母音を表わす w (wunjō ルーン) および j (jēran ルーン) がある。確かに、u (ūruz ルーン)・i (īsaz ルーン) が母音体系をなし、w・j は音韻論的にこれら (u・i) と異音の関係にあるという意味で余分なものとなされるかもしれない。事実、w (wunjō ルーン) は後に銘文テキストの中で u (ūruz ルーン) に取って代わられることもしばしばであった¹⁹。また、w (wunjō ルーン) は p (purisaz ルーン) と形状が似すぎているという面もあった。

Runen:	Werte:
F þ H	f þ χ
L ↑ <	p t k
B M X	b d g
h	s
Y	z
M t o	m n ŋ
↑	l
R	r
P s	w j

エトルリア語・ラテン語に半母音を表わす文字記号はない。古いギリシア語の
 ディガンマϜ（第6字、音価 [w]）は、エトルリア語では有声摩擦音に用いら
 れ、ラテン語ではFが対応する。北イタリアの諸アルファベットも次の表（左
 下）のように半母音を表わす記号をもちあわせていない。

Laut- wert	Alt- phönikisch	Mittel- phönikisch	Punisch	Neupunisch	Laut- wert	Alt- phönikisch	Mittel- phönikisch	Punisch	Neupunisch
ɔ	𐤔 𐤕	𐤕	𐤕 𐤕	𐤕 𐤕 𐤕 𐤕	l	𐤌 𐤌 𐤌	𐤌 𐤌	𐤌 𐤌	𐤌 𐤌 𐤌 𐤌
ɛ	𐤓 𐤓	𐤓 𐤓	𐤓	𐤓 𐤓 𐤓 𐤓	m	𐤍 𐤍 𐤍 𐤍	𐤍 𐤍 𐤍	𐤍 𐤍	𐤍 𐤍 𐤍
g	𐤌 𐤌	𐤌	𐤌 𐤌	𐤌 𐤌	n	𐤎 𐤎	𐤎 𐤎	𐤎 𐤎	𐤎 𐤎 𐤎 𐤎
d	𐤔 𐤔	𐤔 𐤔	𐤔	𐤔 𐤔 𐤔	s	𐤑 𐤑 𐤑	𐤑 𐤑	𐤑 𐤑	
h	𐤕	𐤕 𐤕	𐤕 𐤕 𐤕	𐤕 𐤕 𐤕	ʿ	𐤌	𐤌 𐤌	𐤌 𐤌	𐤌 𐤌 𐤌
w	𐤕	𐤕 𐤕 𐤕 𐤕	𐤕 𐤕	𐤕 𐤕 𐤕	p	𐤐 𐤐	𐤐	𐤐	𐤐 𐤐
z	𐤔 𐤔	𐤔 𐤔 𐤔	𐤔 𐤔	𐤔 𐤔 𐤔	q	𐤐 𐤐	𐤐 𐤐 𐤐	𐤐 𐤐 𐤐	𐤐 𐤐 𐤐 𐤐
ɛ	𐤓 𐤓 𐤓	𐤓 𐤓 𐤓	𐤓 𐤓	𐤓 𐤓 𐤓	g	𐤍 𐤍	𐤍 𐤍 𐤍	𐤍 𐤍 𐤍	𐤍 𐤍 𐤍 𐤍
t	𐤓	𐤓 𐤓 𐤓	𐤓 𐤓 𐤓	𐤓 𐤓 𐤓	r	𐤓 𐤓	𐤓 𐤓 𐤓	𐤓 𐤓	𐤓 𐤓 𐤓 𐤓
ʃ	𐤔 𐤔	𐤔 𐤔 𐤔	𐤔 𐤔	𐤔 𐤔 𐤔	ʃ	𐤕 𐤕 𐤕 𐤕	𐤕 𐤕 𐤕	𐤕 𐤕 𐤕	𐤕 𐤕 𐤕 𐤕
k	𐤕 𐤕	𐤕 𐤕 𐤕 𐤕	𐤕 𐤕	𐤕 𐤕 𐤕	ʔ	𐤕 𐤕 𐤕 𐤕	𐤕 𐤕 𐤕	𐤕 𐤕 𐤕	𐤕 𐤕 𐤕 𐤕

フェニキア文字の変遷を示す図表が前頁の下表である。セム系の文字で母音を表わす文字記号はないが、6 番目に [w] が、10 番目に [j] が見受けられる。[j] を表わす文字は、フェニキア文字でもルーン文字でも、文字体系全体の中で唯一、2つの離れた部分からなる記号であり、また、[w] を表わす記号についても、フェニキア文字・ルーン文字において文字の形状はある程度、似ていると言えよう。

ここまでこの節で検討してきたように、ルーン文字に関して、文字の形状はともかく、文字の配列順序や書記規則（鼻音が落ちる場合があったり語と語の間に区切りがなかったり）などを総合的に判断すると、次のまとめの表が示す通り、フェニキア文字の特性をルーン文字はかなり色濃く反映しているのではないかと考えられる。重子音の表記がない、あるいは、合字が頻繁に見られる等、ラテン文字・ギリシア文字・エトルリア文字といった文字体系には見受けられない諸点も含めて考え併せると、フェニキア文字に直接、起因すると想定され得るルーン文字の特徴がいくつかあることが認められるのである。

	フェニキア 文字説	ラテン 文字説	ギリシア 文字説	エトルリア 文字説
文字の形状の類似	±	±	+	+
文字配列（出だし）	+	—	—	—
書記ルール（CC → C）	+	—	—	±
書記ルール（NC → C）	+	—	—	±
語の区切り	+	—	—	—
半母音	+	—	—	±

まとめ

ルーン文字の出自に関する新しい学説として、この文字の伝播は陸路経由ではなく、むしろ海路によるものと考えられないだろうかという説が実際に提唱されている。アメリカのルーン学者で、*A Concise Grammar of the Older Runic Inscriptions* の著者でもある Antonsen (2002) は次のように述べ、文字体系が海路を経て北ヨーロッパに伝わった可能性を示唆している。

“It is well within the realm of possibilities that the knowledge of writing was brought to the North by sea rather than through the entire continent, completely circumventing the intervening Celtic tribes, since we know of early contacts between the North and the Mediterranean world by sea well as by land.” (Antonsen 2002:116)

同じく海路による文字伝播を想定する考え方をとりながらも、アントンセンのようにギリシア文字の伝播を考えるのではなく、フェニキア文字が海路で北ヨーロッパに伝わったのではないかという考えの研究者もいる (Vennemann 2006・2009)²⁰。古フサルク銘文がローマとの国境付近よりもむしろドイツとバルト海の間のスカンディナヴィア地域に集中していること、かつ、かなり早い時期にアルファベット文字体系が北ヨーロッパに広まっていること等を根拠に、起源前5世紀から3世紀終わりまで大西洋岸を支配していたカルタゴのフェニキア文字が直接ルーン文字に影響を及ぼしている可能性に言及する (Vennemann 2012:530)²¹。

このように、従来の学説とは大きく異なり、新たに、フェニキア文字が海路により北ヨーロッパまで伝わったのではないかという文字伝播のルートを想定する見方が提唱されつつある。こうした新しい研究の動きの中で、例えば主と

して文字配列の変遷を軸として、音変化などゲルマン語に起こり得る諸段階をたて、フサルクの発展プロセスを説明しようとする試みがある。これによれば、フサルクの成立に関して、これまで考えられてきたようにラテン語やギリシア語のアルファベットに由来するとみなすよりは、むしろ、その誕生の背景にフェニキア文字を想定する方がフサルクの全貌を解明するのに筋の通った説明ができるという。先史の古ルーン文字がどこか他文化圏のアルファベットを援用したとするのであれば、そこに関わったのがフェニキア文字のアルファベットであったとみなすのは歴史的にも無理がなく根拠付けがしやすい。確かに、祖フサルク（Ur-Fuþark）の復元などいくつかの課題が残されてはいるが、このような新しい見方をすることによって明らかになる事例も少なくない。

ルーン銘文がゲルマン語の最古の姿から中世末期までの一次資料を残してくれているおかげで、ゲルマン語（特に北欧語）の古い姿をはっきり実在したものとして捉えることができる。このルーン銘文の史料を活用し、例えばウルフイラのゴート語文献と比較することを通し、5～6世紀頃までのゲルマン諸語が東・北・西でほとんど差異のない共通の言語であったことを知る事が可能である。今後、ヨーロッパ古代・中世史に関する広い視野からの歴史学的アプローチと並んで、これまで推測の域を出ないようなテキスト（ルーンの呪術的用法など）の解明のための民俗学的アプローチを援用することで、ことばの問題を中心に据えたルーン学にさまざまな研究基盤が与えられよう²²。

ところで、シルクロード、日本へ渡来した仏教の発祥地ともいふべきところ。ここは東の文化と西の文化が出会い、互いに関わりをもち合い、双方の文化がそれぞれ他によって影響を受けたところである。この地にもルーン文字によく似た文字が見出される。チュルク突厥帝国がモンゴリア高原に残した突厥碑文に刻まれた文字のことである。この文字は一般に「チュルク・ルーン文字」（Turkic runes）と呼ばれている。実際、この文字の使用はモンゴリア高原をは

るか離れて中央アジア（タラス川やフェルガナ盆地さらにサマルカンドの東方ムグ山）に及んでいる。オルホン（Orkhon）川流域の「オルホン碑文」（8世紀）は、故人や出来事に関する記念碑を公式に刻んだものもあるが、その多くは個人的な立場から短い銘文を表記したものである。例えば鏡や容器などの小物には持ち主や作成者の名、もしくは格言めいたテキストが記されている。いずれにしてもチュルク・ルーン文字は古代のチュルク人世界の中でかなりの広範囲に普及していたと考えられる。

ルーン文字の起源をめぐって (その3)

	突厥文字	転写	表示音
1	↓	a	a, ä
2	↑	i	i, i, e
3	>	u	o, u
4	μ	ü	ö, ü
5	∂	b ¹	b
6	⌘	b ²	b
7	⌘	d ¹	d
8	x	d ²	d
9	∂	y ¹	y
10	∂	y ²	y
11	↓	l ¹	l
12	↑	l ²	l
13	∂	n ¹	n
14	μ	n ²	n
15	4	r ¹	r
16	γ	r ²	r
17	⌘	t ¹	t
18	h	t ²	t
19	γ	γ	γ
20	ε	g	g
21	h	q	q
22	γ	k	k
23	Δ	q ³	iq, qī, q
24	↓	q ⁴	oq, uq, qo, qu, q
25	⌘	k ³	ök, ük, kō, kū, k
26	γ	š	š, s
27	フ	s ¹	s, š
28	l	s ²	s, š
29	⌘	m	m
30	γ	ŋ	ŋ
31	1	p	p
32	人	č	č
33	γ	č ³	ič
34	4	z	z
35	3	ñ	ñ
36	M	lt	lt
37	⊙	nt	nt
38	3	nč	nč

チュルク・ルーン文字の多くは右から左に横書きされ、上から下に行を追っているが、一部、漢文の影響からかテキストを左に 90 度回転させて縦書きされ上から下に読まれる。また右に回転させて下から読む碑文もある。岩や丸石に記されたものは比較的自由な表記の方法をとっている。

東ヨーロッパ（南ロシア・北コーカサス・カマ川流域）のルーン文字（ドン・クバン Don-Kuban 銘文と呼ばれている）は、壁・牛骨・銀器などに記されているのが発見され、このルーン文字はチュルク・ルーン文字に実によく似ている。ただし、東ヨーロッパのルーン文字銘文は資料的に少量で、文字と音価の関係や言語の性格は今のところ十分にはわかっていない。ただ、これまでの先行研究で、銘文の言語はチュルク語に所属するものと一般に考えられている。チュルク・ルーン文字の起源は、確かに象形文字や家畜の烙印から発生したとするチュルク起源を唱える説もあるにはあったが、文字の名称が示す通り、文字体系自体が借用されたのではないかと想定されている。東ヨーロッパのルーン文字およびチュルク・ルーン文字のもつ音節文字の要素から、これら両文字がセム系の文字（例：フェニキア文字）を継承していることは確かである。当該の諸文字の形状・形態の特徴等を総合してみるに、ルーン文字は洋の東西を結ぶ接点の位置にあったであろう可能性がかなり高い²³。

註

- 1 Bammesberger, Alfred & Waxenberger, Gaby (2006) の前書き（Vorwort, VII-VIII ページ）にまとめられている。
- 2 Heinz, U.J. (1987) Die Runen (Hermann Bauer Verlag) より；Heinz (1987:19) : „einige Forscher allerdings behaupten, sie (ルーン文字) sei abgeleitet und nicht eigenständig gewachsen oder von einem Angehörigen der nördlichen Völker »erfunden«. Diese Ansicht ist allerdings [...] falsch. Richtig ist, daß mit Runen selten Texte

geschrieben wurden. あるいは Heinz (1987:42) : „Der mythische Hintergrund der germanischen Götterlehre ist allgemein wenig bekannt. Hier werden oft klischeehafte Vorstellungen aus dem dichterischen oder musikalischen Bereich für die religiöse Wirklichkeit selbst genommen. Diese Wirklichkeit läßt sich für einen gemeingermanischen oder nordischen Raum nicht mit Sicherheit festlegen. Unsere Zeugnisse stammen fast alle aus der Zeit, als die Völkerwanderung fast abgeschlossen war, die Christianisierung schon begonnen hatte und sich die einzelnen Stämme oder Völker wesentlich auch räumlich voneinander entfernt hatten.“

- 3 コムリー (1999:190-191) : 「最も初期のルーン文字の記号体系は 24 文字で構成され、f-u-th-a-r-k と呼ばれるアルファベット順に並べられており、その文字記号の特徴は垂直な線と斜めの線である」。なお、Düwel (⁴2008:7) : „Die im großen und ganzen festliegende Reihenfolge der Zeichen entspricht nicht der aus dem Griechischen und Lateinischen bekannten Alphabetfolge.“ も参照のこと。
- 4 谷口 (1971) : 「(…) ルーン文字が根本的には同じ順序で並んでいる」。
- 5 e と p の間の順序の揺れはある。
- 6 谷口 (1971 : 57)
- 7 Looijenga (1997:55) : 「ルーン文字体系成立の当初からこの文字配列が成り立っていたのかどうかは明らかでない」。
- 8 „Die Reihenfolge der Runen aus den Anfangsbuchstaben eines germanischen Vaterunsers“ *Germania*, III (1919). S.43f.)
- 9 Kylverstein のルーン銘文（5 世紀）にキリスト教の影響をもち出すことはできない。
- 10 Wenn man also sagt, daß das Problem, der Herkunft der Runen ungelöst sei, so bezieht sich dies nicht auf die Urmutter, sondern die unmittelbare Mutter, dasjenige Schriftsystem, nach dem die Runenschrift – bestehend aus Buchstaben-Formen, Buchstaben-Namen, Buchstaben-Reihenfolge, Schreibregeln usw. – gestaltet ist. (Vennemann 2011:48)
- 11 栗田・佐藤 (2009:38-40)
- 12 Heizmann (2010), Bang (1997), Miller (1994).
- 13 17 世紀に絶滅した牛の一種。
- 14 西ゲルマン語・北ゲルマン語で共に。
- 15 Düwel (³2001:11)

- 16 Friedrich / Röllig (³1999:§57,§99.c)
- 17 Friedrich & Röllig (1999:§97.b)
- 18 Friedrich & Röllig (1999:§ 3)・谷川 (2001)
- 19 Seebold (2006:162&166)
- 20 Vennemann (2009:857) : „Die Grundthese, daß das Ur-Fuþark nichts anderes war als das phönizische Alphabet (in seiner karthagischen Ausprägung) scheint mir bewiesen.“
- 21 Belegt ist, dass die Karthager – also die Westphönizier oder auch Punier, wie sie die Römer nannten – nach Britannien reisten. Diese Leute waren die größten Seefahrer ihrer Zeit. Es ist kaum vorstellbar, dass sie nicht auch noch den Ärmelkanal überquert haben. (Vennemann 2013-9-14 Samstagsgeschichte)
- 22 ケルトのオガム文字についても研究の進展が俟たれる。
- 23 『言語学大辞典』 別巻「世界文字辞典」(2001:671-675)

参考文献

- 岡崎 晋(1999):「ルーン文字とそのメッセージ——スウェーデン、その他の北欧諸国のルーン文字銘文から——」『学習院大学言語共同研究所紀要』第23号、S. 3-14.
- クリスタル、デイヴィッド／風間喜代三・長谷川欣佑 訳 (1992):『言語学百科事典』大修館
- 栗田伸子・佐藤育子 (2009):『通商国家カルタゴ』講談社
- 『言語学大辞典』 別巻「世界文字辞典」(2001) 三省堂
- ジャン、ジョルジュ／矢島文夫 訳 (1990):『文字の歴史』創元社
- 清水 誠 (2012):『ゲルマン語入門』三省堂
- シュミット、ヴィルヘルム／西本美彦 他訳 (2004)『総論 ドイツ語の歴史』朝日出版社
- 世界の文字研究会 (2009):『世界の文字の図典』吉川弘文館
- 谷川政美 (2001):『フェニキア文字の碑文』国際語学社
- 谷口幸男 (1971):『ルーン文字研究序説』広島大学文学部紀要 (特別号1)
- 谷口幸男 (1987):『ゲルマンの民俗』溪水社
- 西田龍雄 (1981):『世界の文字』講座言語第五巻、大修館書店
- 原 真由美 (2005):『ルーンの系譜』(<http://www.runsten.info>)

- ハルベリ P. / 岡崎 晋 訳 (1990) : 『北欧の文学（古代・中世編）』 鷹書房
- ジョン・ヒーリー / 竹内茂夫 訳 (1995) : 『初期アルファベット』 学藝書林（大英博物館双書）
- カーロイ・フェルデシ=パップ / 矢島文夫 他訳 (1988) : 『文字の起源』 岩波書店
- ページ R.I. / 菅原邦城 訳 (1996) : 『ルーン文字』 学藝書林（大英博物館双書）
- モーリス W.M.P. / 唐須教光 訳 (1995) : 『古代文字の話——エジプト象形文字から線文字 B まで——』 講談社学術文庫
- 藤代泰三 (1989) : 『キリスト教史』 嵯峨野書院
- 矢島文夫 (1999) : 『解説 古代文字』 ちくま学芸文庫
- Anderson, Carl Edlund (2005) “The Runic System as a Reinterpretation of Classical Influences and as an Expression of Scandinavian Cultural Affiliation.” http://www.carlaz.com/phd/AndersonCE_1999_Runes_and_Reinterpretation.pdf
- Antonsen, Elmer (2002) *Runes and Germanic Linguistics*. Berlin : Mouton de Gruyter.
- Arntz, Helmut (1938) *Die Runenschrift*. Tübingen : Max Niemeyer.
- Arntz, Helmut (2009=1944) *Handbuch der Runenkunde*. Tübingen : Max Niemeyer.
- Bammesberger, Alfred & Waxenberger, Gaby (2006) : *Das fuþark und seine einzelsprachlichen Weiterentwicklungen*. Akten der Tagung in Eichstätt vom 20. bis 24. Juli 2003. Berlin : Walter de Gruyter.
- Bang, Jørgen (1997) “Runes: Genealogy and grammatology.” An augmented version of the original Danish essay *Runernes genealogi og grammatologi* which was presented at Aarhus University 10 Oktober 1996. Odense: Odense University, Institute of Language and Communication.
- Barnes, Michael (2012) *Runes. A Handbook*. Woodbridge : The Boydell Press.
- Braunmüller, Kurt (1998) „Methodische Probleme in der Runologie – einige Überlegungen aus linguistischer Sicht.“ In: Düwel, K. & Nowak, S. (Hg.) *Runeninschriften als Quellen interdisziplinärer Forschung*. 1998. Berlin : Walter de Gruyter. S.3-23.
- Bugge, Sophus. (1899) “Om Runeskriftens Begyndelser.” In: *Beretning om Forhandl. paa det 5te nord. Filologmøde*. Kopenhagen. S.57.
- Cunliffe, Barry & Koch, John (2010) *Celtic from the West*. Oxford : Oxbow Books.
- Darms, Georges (1989) „Sprachnormierung und Standardsprache.“ In: Holtus, G., Metzelin, M., & Schmitt, Ch. (Hg.) : *Lexikon der romanistischen Linguistik*, Vol. III, 1989, Tübingen:Max Niemeyer, S.827-853.

- Dtv-Atlas Deutsche Sprache* (2007) München: dtv.
- Düwel, Klaus (1981a) "The Meldorf Fibula and the Origin of Runic Writing." *Michigan Germanic Studies*, 7, S.8-14.
- Düwel, Klaus (1981b) "Runes, Weapons, and Jewelry: A Survey of Some of the Oldest Runic Inscriptions." *Mankind Quarterly* 21, S.71-73.
- Düwel, Klaus (³2001, ⁴2008) *Runenkunde*. Stuttgart : Metzler.
- Düwel, Klaus. & Gebühr, Michael (1981) „Die Fibel von Meldorf und die Anfänge der Runenschrift.“ *ZdA* 110, S.152-175.
- Eichner, Heiner (2006) „Zu den Quellen und Übertragungswegen der germanischen Runenschrift – Ein Diskussionsbeitrag.“ In: Bammesberger, A. & Waxenberger, G. (Hg.) : *Das fupark und seine einzelsprachlichen Weiterentwicklungen*. 2006. Berlin : Walter de Gruyter. S.101-108.
- Friedrich, Johannes & Röllig, Wolfgang (³1999) *Phönizisch-punische Grammatik*. Rome : Editrice Pontificio Instituto Biblico.
- Friesen, Otto von (1904) "Om runskriftens härkomst." In: Språkvetenskapliga sällskapets i Uppsala förhandlingar 2. S.1-55.
- Friesen, Otto von (1913) "Runskriftens härkomst." In: *Nordisk tidsskrift for filologi* (serie 4) 1. S.161-180.
- Haarmann, Harald (²1991) *Universalgeschichte der Schrift*. Frankfurt : Campus.
- Hammerström, Magnus (1929) "Om runskriftens härkomst." In *Studier I nordisk filologi*. 20. S.1-67.
- Hansen, Ulla Lund (1995) *Die Runen der römischen Kaiserzeit Himlingøje - Seeland - Europa Nordiske Fortidsminder Serie B 13*. København : Det Kongelige Nordiske Oldskriftselskab.
- Heizmann, Wilhelm (2010) „Zur Entstehung der Runenschrift.“ In: J.O.Askedal et al. (Hrsg.), *Zentrale Probleme bei der Erforschung der älteren Runen*. 2010. Frankfurt : Peter Lang. S.9-32.
- Henriksen, Mogens Bo (1996) *Harja-kammen fra Vimose-fundet Fynske Minder*. Odense : Odense Bys Museer.
- Høst, Gerd (1976) *Runer. Våre eldste norske runeinnskrifter*. Oslo: Aschehoug.
- Jensen, Hans (1925) *Geschichte der Schrift*. Hannover : Orient-Buchhandlung Heinz Lafaie.
- Jensen, Hans (1969) *Die Schrift in Vergangenheit und Gegenwart*. Berlin : VEB Deutscher Verlag.
- Jansson, Sven (³1984) *Runinskrifter i Sverige*. Stockholm : AWE/Gebers.
- Krause, Wolfgang (1970) *Runen*. Berlin (Sammlung Götschen).

- Larsson, Patrick (2005) "Runes." In: McTurk, Rory (Hg.): *A Companion to Old Norse-Icelandic Literature and Culture*. 2005, Malden, Mass.: Blackwell Publishing, S. 403-426.
- Looijenga, Tineke (1997) *Runes around the North Sea and on the Continent AD 150-700 : Texts & Contexts*. Groningen (Dissertation Universität Groningen).
- Looijenga, Tineke (2003) *Texts & Contexts of the Oldest Runic Inscriptions*. Leiden/Boston : Brill.
- Marstrander, Carl Johan (1928) "Om runene og runenavnenes oprindelse." In *Norsk tidsskrift for sprogvidenskap*. 1. S.5-179.
- Meyer, Richard Moriz (1896) „Runenstudien.“ In *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur*. XXI. S.162-184.
- Miller, Gary (1994) *Ancient scripts and phonological knowledge*. Amsterdam Studies in the Theory and History of Linguistic Science, Series IV: Current Issues in Linguistic Theory 116. Amsterdam : John Benjamins.
- Moltke, Erik (1985) *Runes and Their Origin. Denmark and Elsewhere*, Copenhagen : National Museum of Denmark, Nationalmuseets Forlag.
- Morris, Richard (1988) *Runic and Mediterranean epigraphy*. Odense (North-Western European Language Evolution, Supplement 4).
- Nedoma, Robert (2006) „Schrift und Sprache in den südgermanischen Runeninschriften.“ In: Bammesberger, A. & Waxenberger, G. (Hrsg.) : *Das fuþark und seine einzelsprachlichen Weiterentwicklungen*. 2006. Berlin : Walter de Gruyter. S.109-156.
- Nowak, Sean (2003) *Schrift auf den Goldbrakteaten der Völkerwanderungszeit: Untersuchung zu den Formen der Schriftzeichen und zu formalen und inhaltlichen Aspekten der Inschriften*. Dissertation, Universität Göttingen.
- Odenstedt, Bengt (1990) *On the Origin and early History of the Runic Script*. Uppsala: Almqvist & Wiksell International.
- Philippa, Marlies, & Aad Quak (1994) : *Runen. Een helder alfabet uit duistere tijden*, Amsterdam : T. Rap.
- Seebold, Elmar (2006) „Das fuþark auf den Brakteateninschriften.“ In: Bammesberger, A. & Waxenberger, G. (Hg.) : *Das fuþark und seine einzelsprachlichen Weiterentwicklungen*. 2006, Berlin : Walter de Gruyter. S.157-168.
- Seim, Karin Fjellhammer (2007) „Runologie.“ In: Odd Einar Haugen (Hg.) : *Altnordische Philologie : Norwegen und Island*. 2007. Berlin (aus dem Norwegischen von Astrid van Nahl), S.147-222.

- Spurkland, Terje (2001) *I begynnelsen var fupark. Norske runer og runeinnskrifter*. Oslo : Landslaget for norskundervisning, Cappelen akademisk forlag (= LNUs skriftserie; 138).
- Stoklund, Marie (2006) „*Vimose. Runologisch.*“ *Reallexikon der Germanischen Altertumskunde*. Berlin : Mouton de Gruyter. S.410f./410-414.
- Vennemann, Theo (2006) „Germanische Runen und phönizisches Alphabet.“ *Sprachwissenschaft* 34, S.367-429.
- Vennemann, Theo (2009) „Zur Reihung der Runen im älteren Fupark.“ In: Wilhelm Heizmann, Klaus Bödl & Heinrich Beck (Hg.) : *Analecta Septentrionalia: Beiträge zur nordgermanischen Kultur- und Literaturgeschichte*. 2009. Berlin : Walter de Gruyter. S.834-863.
- Vennemann, Theo (2011) „Griechisch, lateinisch, etruskisch, karthagisch? Zur Herkunft der Runen.“ In: Elvira Glaser, Annina Seiler & Michael Waldispühl (Hg.) : *LautSchriftSprache*, Beiträge zur vergleichenden historischen Graphematik. 2011. Zürich : Chronos. S.47-82.
- Vennemann, Theo (2012) *Germania Semitica*. Berlin : Mouton de Gruyter.
- von Friesen, Otto (1906) *Om runskriftens härkomst*. Uppsala : Uppsala universitetets årsskrift.